

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所教授



「環境の研究をしているのだから、洞爺湖サミットを前に『山川草木悉皆成仏』の仏教思想をテーマにシンポジウムでもやってみてはどうか」と知人にいわれた。なるほど、この世にあるもの、あらゆるものがみな仏になれるというこの日本的仏教の

教えは、今世界で展開されている環境問題をめぐる議論に欠けている視点のひとつだ。

「ごく大雑把に言えば、「山川草木…」の思想は古くからの日本人の生態観をよく反映している。西洋と違い牧畜が発達しなかった日本列島では、大型の動物を捕獲して食べる習慣は

山川草木悉皆成仏

多様性の喪失は環境問題

発達しなかった。たまに捕獲する動物も小型のものが多かった。だから人間は百獣の王たり得なかった。森や里にはさまざまな生き物がいて、人間もまたその一員であることを体験的に知っていた。こうしたことが、人間に自分たちが他の存在と共生しているという感覚

ところが、「多様性はなぜ大切か」という問いは、現代生物学の世界では大真面目に議論されたりもする。それは現代生物学が、あらゆる生命現象をDNAなどの研究を通じて統一的にとらえようとするあまり、多様なものを研究対象から排除してきたことと無関係で、たとえば多様性が失われたことそれ自体が今や大きな地球環境問題になっている。

ともいえる。今地球環境問題といえば温暖化、二酸化炭素の排出など、限られた問題だけが話題にされることが多い。現実の問題は多岐にわたっているのに、である。

を生み出させた。「多様性」を肌身で理解できていたことが「山川草木…」の思想を受け入れる背景になったのである。多様性の大切さは、「山川草木…」の思想の中ではいわば自明のことだ。「多様性はなぜ大切か」などという「奇問」が生まれる素地はあまりない。

はな。いっぽう日本には中世からの本草学の伝統があり、今でいう博物学の体系を築き上げてきた。本草学は結局学問の体系を作らなかつたという言い方をする研究者もいるが、それは、西洋的な学問体系を作らなかつたというだけのことだ。今の日本の学問は、伝統的

葉の多様性、考え方の多様な多様性、考え方の多様性などあらゆる面での多様性の喪失が、地球環境問題を深刻化している。「山川草木…」という、西洋にはなかつたこの思想を広めることは、いま、地球環境問題を根本から考え直すために意外と重要なことなのかもしれない。

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。